Exhibition report

企画展

泉州 岸和田の宗教文化―高僧伝と寺社縁起―

2021年1月21日（木）より2月22日（月）までの間、標記企画展を開催した。岸和田に特にゆかり深い四人の高僧たち―行基菩薩・役行者・燈誉上人・徳本上人に着目し、その生涯を物語る地域の文化財を読み解こうとしたものである。加えて、岸和田のシンボルとも言うべき『蛸地蔵縁起絵巻』、さらに残念ながら原本は散り散りになってしまっている『神於寺縁起絵巻』の精巧な近代模本をお借りし、詳しく紹介することで、岸和田の歴史・文化の一端を弊所展示室に復原する機会を頂戴した。関係各位に記して深謝申し上げたい。なお、その詳細については、企画展資料集（図録）と展示品目録附解説をご参照いただきたい。

紙幅が限られていることもあり、ここでは岸和田市稲葉町会蔵『極楽寺縁起』を糸口として、本展の一部を振り返ってみたい。なお、この「極楽寺」は岸和田市稲葉町、菅原神社境内に建つ麻福山大門坊極楽寺のこと。極楽寺町の極楽寺からは本展では『燈誉上人行状絵伝』をお借りして展示することができたが、こちらについては稿を改めようと思う。

さて、本書巻末の嘉永四年［1851］霜月五日奥書には、本文と同筆で「元亨釈書智光法師伝行基／伝智光曼荼羅縁起／袖中抄當院古記録等／皇都寺町和泉式部〈遺蹟〉／華嶽山東北寺誠心院住／静居自性謹誌」と見える。京都寺町（新京極通六角下がる）誠心院住職であった静居自性が奥書に見える諸書を参看して縁起本文を制作・書写して極楽寺に納めたものであることが知られる。ただし静居自性と極楽寺との関わりは現段階ではよく分からない。なお、この誠心院には、隣寺である誓願寺の『誓願寺縁起』および能「誓願寺」に依拠した『和泉式部縁起』（寛永二十年［1643］写、絵巻二巻二軸）が蔵されている（大橋清秀「和泉式部縁起について」『論究日本文学』11,1959）。

「この寺は人皇四十五代聖武天皇の御世神亀天平のころ智光法師の開基なり」と書き出す『極楽寺縁起』は、奥書に見られる諸書に加え『日本霊異記』『今昔物語集』『古本説話集』といった説話集、平安時代後期の歌学書などに見られる「真福田丸（麻福田丸とも）説話」「智光堕地獄説話」「智光曼荼羅感得説話」を机上で接合した智光伝を記すもので、極楽寺創建についても冒頭部分以上の言及がない。行基の前世であった少女が幼少時代の智光すなわち「真福田丸」を仏道の世界に導く善知識となったとする「真福田丸説話」については、恋慕が機縁となっているとする点、『奥義抄』以後の歌論書に類するという特徴があるものの、比較的簡略な内容にとどまる。

しかしながら、智光が「泉州稲葉村」の出身であるとする点は本書に特異である（諸書は河内国の出身とする）。これは智光と稲葉村との縁を言うための訛伝だろうが、享保十六年［1731］に刷られた「智光所感如来掌中示現曼荼羅」一幅が稲葉町会所蔵として伝存していることによって、岸和田・稲葉の地域史にとっての新たな意義が生じてくる。この曼荼羅は、近世に入って発見された異相本智光曼荼羅をもとにして享保十六年に開版された版本に着彩を施したもの。版木は京都三条の檀王法林寺に蔵されている。縁起本文の末尾近くには「智光上人掌中示現の曼陀羅をは元興寺の後の住僧梓にゑり又其を紙に摺或は彩色表装なと清らにして當山は智光の誕生の所なりといひて贈られけるよし此寺の口碑に伝へぬ」とあり、「智光曼荼羅」を中心にすえた講が営まれていたことが本書によって知られるのである。両者は、地域史における意味を補い合うかたちで文化財として伝存し、そして今も地域社会の年々の営みの中で機能しているのである。

（大橋直義／日本中世文学・文献学）